

多文化社会における文化変容への初歩的探求 : Berry 文化変容理論とその実証研究に着目して

劉, 梓晨
九州大学大学院人間環境学府教育システム専攻 : 修士課程

<https://doi.org/10.15017/7325628>

出版情報 : 九州大学教育社会学研究集録. 28, pp.75-86, 2024-09-15. Seminar of Educational Sociology Department of Education, Graduate School of Human-Environment Studies Kyushu University

バージョン :

権利関係 :



多文化社会における文化変容への初歩的探求

—Berry 文化変容理論とその実証研究に着目して—

A Basic Exploration of Acculturation in Multicultural Societies:
Focusing on Berry, J. W.'s Acculturation Theory and Its Empirical Studies

劉梓晨

1. 問題の所在：グローバル化において変遷されている 「文化変容」

グローバル化の背景において、経済、文化、科学技術などの分野での国境を越えた交流がますます盛んになってきている。異なる文化的背景を持つ個人同士の相互作用も、世界規模でより密接になっている。人々の生活様式や行動パターンは、かつての国家の枠組みを超えて展開されるようになり、従来の国境の制限が取り払われつつある。ドイツの社会学者 Ulrich Beck は、グローバル化を、経済、情報、環境、技術、異文化間の対立、そして市民社会などのさまざまな分野において見られる日常行動の「脱境界化」という現象だと定義している

(Beck, 2008, p.24)。この「脱境界化」によって、個人は異文化環境での適応を余儀なくされ、そこで異なる価値観や行動パターンと接触する中で、自身の文化的アイデンティティや行動様式に変容が生じることになる。

このような環境で個人がどのように新しい文化に適応していくかという問題は、社会学、心理学などの学界で大きな注目を集めている。特に異文化心理学では、

「文化変容」(acculturation) は一つ重要な部分として研究されている (Berry, 2003, p.17)。文化変容の研究に関して、少なくとも以下の二つの定義が広く引用されている。

「文化変容」とは、異なる文化を持つ集団が直接的かつ継続的に接触することによって生じる現象であり、その結果としての変化は、元の文化パターンのいずれかまたは両方の集団に生じる可能性がある。この定義によれば、「文化変容」は「文化変化」とは区別されるべきであり、文化変化はその一側面に過ぎない。また、「同化」とは異なるものであり、「同化」は時折「文化変容」の一段階となることもある。さらに、「文化伝播」とも区別されるべきであり、文化伝播はすべての文化変容の事例において起こるものである一方で、上述の定義

に示された人々の接触がなくても頻繁に生じる現象であり、文化変容のプロセスの一側面に過ぎない。

(Redfield, Linton, & Herskovits, 1936, pp. 149-152)。

さらに、

「文化変化」とは、二つ以上の独立した文化システムの結合によって引き起こされる現象である。「文化変容」は直接的な文化伝播の結果として生じることあれば、外来文化が引き起こした生態学的または人口学的変化のような非文化的原因によって生じることもある。また、外来の特性やパターンを受け入れた後の内部調整が必要な場合には遅延的に生じることもある。あるいは、伝統的な生活様式への反動的な適応として生じることもある (Social Science Research Council, 1954, p. 974)。

上記の 2 つの定義から明らかなように、文化変容は、より広範な文化変化の概念の一部として捉えられ、一方または双方の集団に変化をもたらすと考えられている点で、単なる同化とは異なる。また、文化変容は相互的なプロセスであり、非主導的な集団だけでなく、接触するすべての集団に変化をもたらす可能性があるプロセスである。

これらの権威ある定義が 1930 年代と 1950 年代に提唱されたにもかかわらず、実際には 20 世紀前期から中期にかけて、文化変容の単次元モデル、つまり新しい文化環境に直面した個人は最終的に主流文化に同化されるという同化モデルが支配的であった (余、鄭, 2005, p.838)。例えば、Gordon (1964) は、文化変容者がアメリカ社会の文脈で経験する同化プロセスのいくつかの次元について説明し、文化的同化、構造的同化、婚姻同化、同一化同化、態度受容同化、行動受容同化、市民同化など、同化の 7 種類を特定している (1964, pp.60-83)。こうした文化同化モデルには一次元という欠点があり、それは、移民が主流社会に完全に同化することを理想とし、同化の過程を直線的な発展と見なし、主流社会が文化変容者に与える影響だけを強調し、文化変容者と滞在国社会との

相互作用を無視していることという指摘がある(孫,2010, p.41)。

それに対し、1970年代以降、ますます多くの心理学者がこのモデルに異議を唱え始めており(余、鄭, 2005, p.838)、グローバル化による異文化での接触が必然的に同化を引き起こすという旧観念は、もはや通用しなくなっていると言えよう。Berry は、グローバル化が進行する中で、文化が消滅するどころか、逆に多くの文化が再確認や再活性化される現象が生じていると指摘している(Berry, 2008, pp.329-330)。例えば、グローバル化が進む一方で、特定の文化が強化される「ローカリゼーション」や、民族国家が分裂し、より小規模で文化的に定義されたコミュニティが形成されることがある。異文化接触がネガティブな体験や差別を伴う場合、個人やコミュニティが自己の文化的アイデンティティを強化するという現象も観察されている。

Berry が提唱している文化変容モデルは、異なる文化を持つ個人や集団がどのように新しい文化環境に変容するかを説明するための双次的な枠組みを提供しており、現在の研究で広く用いられている。このモデルでは、文化保持と異文化との接触という二つの次元が重要視され、それに基づいて同化 (assimilation)、分離 (separation)、統合 (integration)、周辺化 (marginalization) という四つの文化変容ストラテジーが定義されている (Berry, 1997, p.10)。グローバル化の結果は必ずしも一方向の同化とは限らないと言える。

本稿は、Berry の「文化変容モデル」を中心とする文化変容理論を検討し、Berry および Berry と他の学者による実証研究を概観したいと思う。

2. 先行研究の整理：Berry の文化変容理論と日本学界の関連研究の検討

2.1.1 文化変容のフレームワーク

前述したように、文化変容はもともと集団レベルの現象として研究されてきたが、現在では個人レベルの現象としても広く認識されており、Graves は「心理的文化変容」(Graves, 1967) と呼んでいる (Berry, 1992)。集団的および個人的レベルにおける文化変容のプロセスは図1で示されている。

集団的レベルでは、文化変容により以下の変化が起こると考えられる。物理的变化(新しい居住地、人口密度の増加、汚染の増加等)、生物的变化(新しい疾病等)、政治的变化(非支配的な集団がコントロールされ

ること等)、経済的变化(新しい雇用形態への移行)、文化的变化(言語、宗教、教育、技術機関の変更等)、そして社会的変化(集団間および個人間の関係)である (Berry, 1992, p.70)。

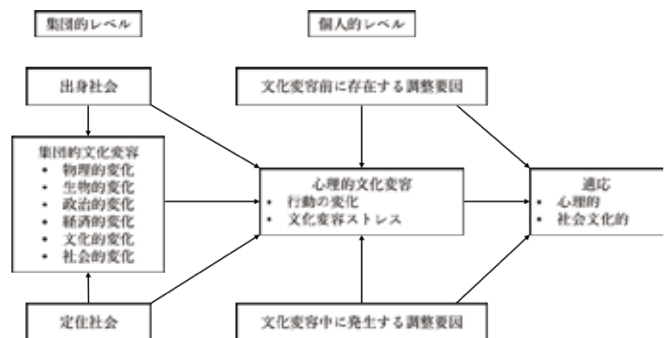


図1 文化変容のフレームワーク

出典：Berry, J.W., 1992, Acculturation and adaptation in a new society, International migration, 30, p.81.より引用(筆者訳)

個人的レベルでは、Berry はその変化を「心理的文化変容」とまとめ、「行動の変化」と「文化変容ストレス」に分類している。Berry (1980) は、「行動の変化」を「言語」、「認知スタイル」、「人格」、「アイデンティティ」、「態度」の5種類にまとめており、これらは文化変容のプロセスで変化していく (pp.17-21)。また、文化変容のプロセスには、社会的・心理的問題が伴うことが多く、これは「文化変容ストレス」として知られている。文化変容ストレスとは、個人の健康状態の低下であり、身体的、心理的、社会的側面を含むことがある (Berry, 1987, p.493)。

適応には、主に内発的なもの、心理的なもの(幸福感や自尊心など)、あるいは社会文化的なもの(新しい社会における他者とのつながり)があると見なされる (Berry, 2006, p.289)。

2.1.2 文化変容モデル

このモデルでは、文化変容は変容者の態度に基づいて「統合 (integration)」「分離 (separation)」「同化 (assimilation)」「周辺化 (marginalization)」の4つのタイプに分類される。文化変容のタイプは、変容者が次の二つの質問にどう答えるかによって決まる。第一に、文化的アイデンティティや特徴を維持することに価値があると考えられるか。第二に、他のグループとの関係を維持することに価値があると思うか。つまり、自文化と他文化との2つの次元である。以下の図2で示すようである。

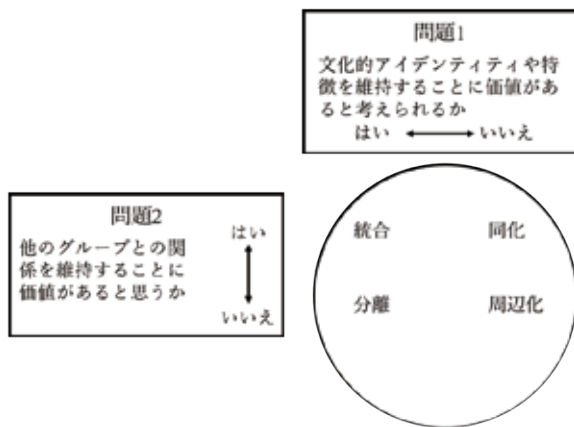


図2 2次元による文化変容モデル

出典：Berry, J. W., 1997, Immigration, acculturation, and adaptation, Applied psychology, 46(1), p.10.より引用（筆者訳）

この二つの質問に対する選択は、Berry が定義する四つの「文化変容戦略」、すなわち「同化」、「統合」、「分離」、「周辺化」につながる。個人が自分の文化的アイデンティティを保持するわけではなく、他の文化との密接な交流を求める場合、同化戦略が用いられる。分離戦略は、元の文化を重視し、新しい社会のメンバーとの交流を避ける個人に対して定義される。統合戦略は、元の文化を保持することに興味を持ちつつ、他のグループと日常的に交流したいと考える個人に適用される。これにより、ある程度文化の完全性が保たれ、民族集団の一員として、より大きな社会ネットワークの一部として関与することが求められる。周辺化戦略は、文化を保持する可能性や興味がほとんどない（通常は文化の喪失を強制されるため）場合や、他者との関係を築く興味がほとんどない（通常は排斥や差別のため）場合に定義される（Sam & Berry, 2010, p.476）。

Berry (1995) はこの4つの文化変容戦略を説明するために、イタリアからカナダに移住した家庭を例に挙げた。父は統合戦略を取っており、新しい社会の経済や政治活動に参加し、英語とフランス語を学ぶことを希望している。同時に彼はイタリア・カナダ協会のリーダーであり、余暇の大部分を他のイタリア系カナダ人との交流に費やしている。母は分離戦略を取っており、イタリア語の使用とイタリア文化圏での交流を堅持し、ホスト国の仕事や文化活動には参加しない。彼女の個人生活や集団生活は主にイタリアの世界にある。娘は同化戦略を好んでおり、家庭でのイタリア語に苛立ちを感じ、英語を話し、学校の活動に参加し、通常はカナダの同年代の友人と一緒に過ごすこ

とを好む。息子は自分のイタリアのアイデンティティを認めたくないと思っているが、イタリア訛りや習慣のために同級生から排斥され、最終的には周辺化戦略に退き、社会的や学問的な困難に直面し、親や警察と衝突している（Berry, 1995, pp.472-473）。

以上の4つの戦略は非支配的な集団の観点からであり、自由に選択できるという仮定に基づいていると考えられる。しかし、支配的な集団が特定の文化変容の形式を強制したり、非支配的な集団や個人の選択を制限したりする場合、他の用語が使用される必要がある（Berry, 2005, p.705）。そのため、Berry (1980) は、「最初の2つの質問を決定する権利は誰にあるのか」という第3の基本的な問いを提起し、第三の次元を追加している（1980, p.13）。例えば、分離戦略を選択することがあるが、それが支配的な社会によって要求される場合、それは「隔離」と呼ばれる。同様に、同化を選択する場合、メルティングポットの概念が適切であるが、強制された場合、それは「圧力鍋」に似ている。周辺化が支配的な集団によって強制される場合、それは「排斥」と呼ばれる。最後に、多様性が社会全体で受け入れられ、すべての異なる人種文化集団が含まれる場合、それは「多文化主義」と呼ばれる（Berry, 2005, p.706）。以下の図3に示されている。

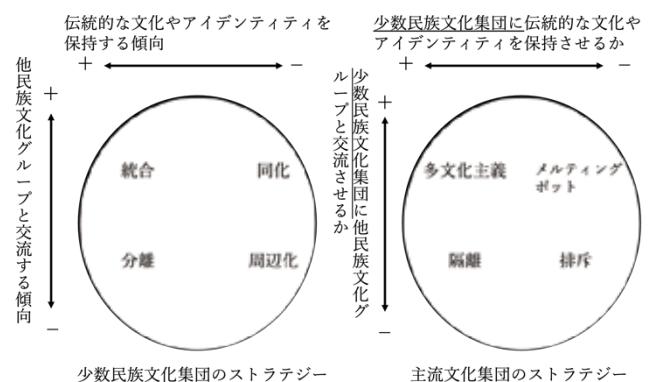


図3 3次元による文化変容モデル

出典：Berry, J. W., 2005, Acculturation: Living successfully in two cultures, International Journal of Intercultural Relations, 29(6), p.705.より引用（筆者訳）

例で言うと、余、鄭（2005）が挙げているように、アメリカの20世紀前半の現実と同じように、支配的な文化集団がさまざまな手段で移民の「同化」を促す際、社会を「メルティングポット」として、すべての少数民族文化を溶かそうとしている。支配的な文化集団が「分離」を推進する際には、「人種隔離」の戦略が

採用され、これは南アフリカやアメリカで実施された。集団を「周辺化」する際には、実際には「排斥」のストラテジーが用いられる。最後に、支配的な文化集団が他の文化の対等な重要性を認め、文化多様性を追求する際には、「統合」に対応する「多文化主義」ストラテジーが登場し、これはカナダなどで好まれ、世界的に注目を集め始めている (p.839)。

2.1.3 心理的文化変容

前述したように、個人が他の文化圏に移動すると、「行動の変化」と「文化変容ストレス」の2つの変化が起こる。Berry はこれを「心理的文化変容」と総称し、文化変容の成果を概念化する2つの方法として提示している (Berry, 2005, p.707)。「行動の変化」は、新しい文化を学ぶという行為と、元の文化の特徴を捨てるという2つの区別できる現象からなる。また、この2つのプロセスには衝突が生じることもある (Berry, 1992, pp.73-74)。つまり、「行動の変化」には、「文化の学習」

(Cultural Learning)、「文化の放棄」(Culture Shedding)、「文化の衝突」(Culture Conflict) という3つの部分があるとされている (Berry, 1992, p.83)。

文化変容ストラテジーを組み合わせることで分析すると、Berry (1992) は、ほとんどの文化の学習と文化の放棄は同化ストラテジーの中で発生し、分離ストラテジーでは最も少ないと考えている。統合ストラテジーでは、新しい文化の学習が多く、文化の放棄は限定的であるが、周辺化ストラテジーではその逆である。分離と周辺化では、支配的な社会に対する抵抗や拒絶が伴うため、衝突が高い傾向がある。受け入れられることや支配的な社会に受け入れられることは、統合と同化に関連し、通常、衝突のレベルは低くなるとされている (p.74)。

より高いレベルの「文化の衝突」を経験し、それらの経験が問題であるが制御および克服可能であると認識される場合、「文化変容ストレス」は「心理的文化変容」をより適切に概念化するための方法と見なされる

(Berry, 1997, p.13; 2006, p.294)。理由としては、このような状況の中で、個人は自分の文化理解に挑戦するような人生を変える出来事を経験し、これらの変化事象は文化変容の体験に起因するものであるため、「文化変容ストレス」と呼ばれるからである (Berry, 2006, p.294)。

また、「カルチャーショック」より、Berry は「文化変容ストレス」を用いることを好むと指摘している

(Berry, 1997; 2005; 2006)。その理由としては以下の2点にまとめている。まず、「ショック」という概念は否

定的な意味しか持たない一方で、「ストレス」という概念は健康心理学の分野では積極的なもの（順応ストレス）から否定的なもの（逆境ストレス）まで幅広く含むことができるため、文化変容は新しい機会（積極的な面）と差別（否定的な面）という両方を含むため、「ストレス」の概念の方が文化変容中に経験される感情の範囲により適している。また、関心のある現象は二つの文化の交差点に存在し、それらは異文化的であり、起源の文化だけではない。「文化」という用語は一つの文化だけを含むことを意味するが、「文化変容」という用語は二つの文化が相互作用し、ストレス現象を生じることを示唆している (Berry, 2005, p.707)。

統合ストラテジーを追求することは（少なくとも支配的な社会に受け入れられる場合に）最もストレスが少なく、周辺化ストラテジーが最もストレスが大きい。同化と分離のストラテジーによるストレスはその中間であり、時には一方が、時には他方がストレスが少なくなると Berry は指摘している (2006, p.294)。

以上のことから、文化変容のプロセスにおけるストレスには、変容者に心理健康の問題を引き起こす否定的な意味と、変容者に機会をもたらす積極的な意味の両方があることがわかる。このように、文化変容とストレスの関係は、下の図4で表すことができよう。

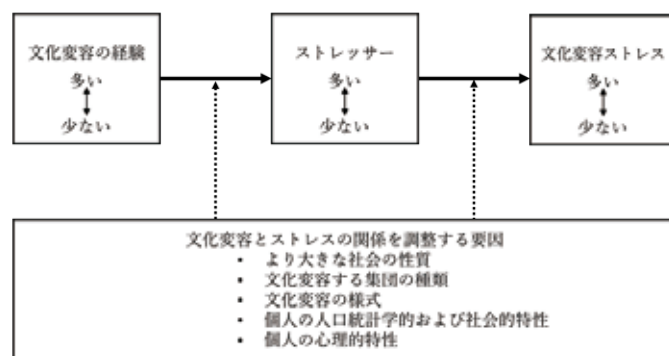


図4 文化変容とストレスの関係

出典：Berry, J. W., Kim, U., Minde, T., & Mok, D., 1987, Comparative Studies of Acculturative Stress, International Migration Review, 21(3), p.493.より引用（筆者訳）

図に示されているように、文化変容者が経験する文化変容ストレスの程度は主に「文化変容の経験」と「ストレス」いう二つの要因によって影響されている。Berry (1987) は、これら3つの概念の間に関係が生じる可能性はあるが、固定的ではないと指摘し、これらの関係は、いくつかの調整要因に左右され、それぞれ

がこれら3つの概念の関係に影響を与えることができる (p.494)。まず、より大きな社会の性質 (定住国の性質) があり、多文化主義のイデオロギーか、同化主義のイデオロギーかによって異なる。次に、文化変容を行う集団の性質である。これには、移民、難民、先住民、エスニックグループ、一時滞在者などが含まれ、これらは自発性、移動性、接触の持続性の点で異なり、集団の個々人の精神的健康状態に影響を及ぼす可能性がある。また、文化変容の様式である。これには同化、分離、統合、周辺化が含まれる。最後に、文化変容者の人口統計学的、社会的、心理学的特徴がある。これらには、学歴、年齢、性別、認知スタイル、過去の異文化経験などが含まれる (pp.494-495)。

2.1.4 適応

文化変容プロセスの最終結果は「適応」になる。「適応」(adaption) とは、個人や集団が外部の要求に対処するために起こる比較的安定した変化を指す (Berry, 2003, p.32)。ほとんどの文化に変容する個人にとって、ある程度の期間が経過すると、新しい文化的背景に一定の適応が見られることが一般的である。様々な要因に基づいて、これらの適応は多様な形をとる場合がある。時には、同化や統合の戦略を採用し、かつ主流社会が適応する個人や集団に対して受容的な態度を示すと、「適合度」が高まることがある。しかし、分離や周辺化の状況にある場合、適応が達成されず、集団が対立モードに陥り、文化変容ストレスや心理的な病理を引き起こすこともある (Berry, 1997, p.299)。このように、適応は正の結果にも負の結果にもなり得る (必ずしも適応が良いことを意味しない) (Berry, 2003, p.32)。

また、適応は多面的であり、「心理的適応」(Psychological Adaptation) と「社会文化的適応」(Sociocultural Adaptation) の二つの主要な側面に分けている。心理的適応は主に個人の心理的および身体的健康に関係し、社会文化的適応は新しい文化環境で日常生活を管理する能力を指す (Berry, 2005, p.709)。

2.2 日本で取り扱われた Berry 文化変容理論の関連研究

日本の学界においても、Berry 文化変容理論に関連する研究もいくつか見られている。井上・伊藤 (1997) は、留学生の来日1年目における文化変容態度と精神的健康との関連を調査し、Berry の文化受容理論を基に、

統合、同化、分離、周辺化の4つの態度が精神的健康に与える影響を、3つの時点での質問紙調査で分析している。結果として、留学生の統合的態度が精神的健康に最も好影響を与えることが示された。特に、1年後に文化変容態度が精神的健康に強い影響を及ぼすことが明らかにされている。趙・田中 (2020) は、在日中国人高度外国人材9名を対象に、文化変容戦略と二文化への態度を分析した。彼らの選択は「中国人」「統合人」

「超越志向」に分かれ、日本文化と中国文化を職場と私生活で使い分けていることが明らかになった。また、超越志向は統合の一種と解釈され、統合が最も適応的な戦略であると示唆されている。趙・田中 (2022) は日本に長期滞在する中国出身者の文化変容戦略と心理的適応の関係について、307名を対象に調査を実施し、統合と同化が幸福実感と達成実感において有利であることが示された。エスニック文化の維持は心理的適応にほとんど影響を与えず、特に分離が不利であることが確認されたが、抑うつには有意な差が見られなかった。中本 (2021) は、日本企業に就職した東・東南アジア出身の元留学生4名を対象に、自己実現度と日本社会の異文化受容力を追跡調査し、職場環境への適応、自己効力感、キャリア展望を中心に分析し、同化圧力と自己実現との関連を考察している。結果として、職務上の自己効力感が日本社会における受容度の重要な要素であることが示され、メンター的な存在が自己実現に大きく寄与することが明らかにされた。前田 (2018) は、フィリピン人技能実習生の文化変容戦略とメンタルヘルスの関連性を調査し、男性、独身、子供がいること、低い日本語能力、低い日本文化受容、そして高い文化変容ストレスがメンタルヘルスを悪化させる要因として特定された。また、ソーシャルサポートの不足が日本語能力や文化受容に影響を与え、メンタルヘルスに影響を及ぼすことが示唆された。木村 (1996) は、カナダに移住した日系女性移住者を対象に、文化変容ストレスとソーシャルサポートの関係を分析した。調査では、英語の習熟度や移住への意志が文化変容ストレスに強い影響を与える一方、ソーシャルサポートがそのストレスを緩和する効果を持つことが示された。特に、エスニックコミュニティからのサポートや、家族との交流が、精神的適応において重要な役割を果たしていることが強調されている。

しかし、多くの日本語の先行研究は、統合戦略を最も理想的な文化変容の形態と見なす傾向がある。例として、井上・伊藤 (1997) の研究も、留学生が

統合的態度を取ることで精神的健康に好影響を与えているが、他のストラテジー、特に分離や周辺化の影響を十分に検討していない。他のストラテジーが実際に持つ可能性、そして個別のケースにおける複合的な変容メカニズムが見過ごされているという問題がある。また、日本は比較的均質な文化（集団主義）を持つ社会であり、文化変容の過程で経験する社会的圧力は、Berryの理論が想定する多文化主義的な国々と異なるであろう。中本（2021）の研究では、日本の企業における「同化圧力」が自己実現に影響を与えていることが示されている。日本では、異文化を完全に統合するよりも、同化やエスニック文化を背景にした選択が求められる場合が多いと考えられる。このような日本特有の社会文化的条件を無視して、Berryの理論をそのまま適用することには限界があるであろう。さらに、日本語の文献の多くでは、Berryの理論が単純化されて扱われることがあると考えた。文化変容を「統合」と「同化」などの明確なカテゴリーに分け、動的で複合的な文化変容のプロセスが考慮されていない。実際には、個人が状況によって複数の文化変容ストラテジーを使い分けることがある（例えば、趙・田中（2020）の「超越志向」など）にもかかわらず、理論が固定的に解釈されがちである。

上述の関連研究における限界を踏まえると、より動的で柔軟な視点からBerryの文化変容理論とその異なる状況での応用を再評価する必要がある。次章の再検討を通じて、文化変容が実際にはより複雑で動的な特性を持つことを明らかにしたいと考えている。

3. 「動的アプローチ」の観点から文化変容の実証研究に対する分析

文化変容に関する実証研究において、Berryをはじめとする多くの学者が、出身文化と定住文化の間での移民の文化変容を中心に多くの成果を上げてきた。これらの研究は、主に欧米諸国に焦点を当てたものが多く、単一国家内の多民族間での文化変容に関する研究も一部見られる。しかしながら、これらの研究には、文化変容を静的なプロセスと見なす傾向がある。つまり、量的研究を通じて、個人の行動や態度の表れを評価し、文化変容のレベルを判断するというものである。この伝統的な方法は、文化変容を一方的かつ徐々に増加するプロセスとして捉え、個人が主流文化を徐々に吸収し、内面化することで最終的に固定された適応状態に到達すると見なす傾向がある。たとえBerryの文化変容モデルが双方向的

なモデルであったとしても、実証研究においては一方向性への偏りが見られることがあると考えている。

異文化間心理学における「動的アプローチ」については、Hong, Y.-y., Morris, M. W., Chiu, C.-y., & Benet-Martínez, V. (1998) が、文化変容を静的で普遍的なものではなく、「動的なアプローチ」から捉えることを提唱した。従来の異文化間研究が、集団間の高度に抽象化された概念に焦点を当てがちであるのに対し、動的アプローチは、多元文化の体験の複雑性をよりよく捉え、文化の影響が異なる状況下で非線形的に変化することを明らかにする (pp.3-4)。つまり、文化変容は線形的または単調に進行するものではなく、状況に応じて個人が異なる文化間で「フレーム・スイッチング」(frame switching) (p.4) を行い、異なる社会的状況に対応するために柔軟に文化を切り替えることがあるとされる。また、この研究は「状況の手がかり」(p.31)の重要性を強調しており、状況の手がかりが個人に内在化された特定の文化フレームを活性化させ、その結果、個人が特定の状況下で時には出身文化に一致する行動を、また時には定住文化に一致する行動をとることがあるとしている。さらに、状況の手がかりのような受動的な影響に加えて、文化変容における個人の能動性 (p.31)、すなわち特定の認知フレームを自発的に起動させることで、自身の文化的アイデンティティを能動的に調整することの重要性も強調されている。

本章では、「非線形性」、「状況の手がかり」、「個人の能動的調整」の観点から、Berryや彼と他の学者が共同で行った文化変容の実証研究をいくつか選んで再解釈し、新たな知見を得ることを目指す。

3.1. 異なる地域文化間における文化変容研究

まず、トルコ移民がカナダでの就業経験が精神的健康や適応に与える影響に関する研究 (Aycan, Z., & Berry, J. W., 1996) である。この研究における「非線形性」は、トルコ移民がカナダにおける文化変容の一部が時間と環境の変化に伴い段階的に変化するが、一貫性を欠くプロセスに反映されている。研究によると、移民の社会経済的地位はカナダ到着後の最初の6ヶ月間で著しく低下し、その後時間の経過とともに徐々に回復する (p.246)。しかし、この回復は異なる次元において非線形的であり、例えば、収入はカナダ到着後の1年目で顕著に増加する一方で、職業地位の回復はより緩慢であり、場合によっては移民前の水準に完全には回復しない (p.246)。「状況の手がかり」は、トルコ移民が労働市

場に初めて参入する際に直面する言語能力、資格認定、カナダでの職務経験の欠如などの障壁として現れるが、これらの障壁は時間の経過とともに徐々に減少する (p.248)。つまり、これらのトルコ移民は異なる状況下で異なる知識構造を活性化させ、それが彼らの行動に影響を与える。「個人の能動的調整」としては、これらのトルコ移民がカナダ社会に適応するために積極的に取り組む措置、例えば語学コースや職業資格トレーニングに参加することが挙げられる (p.240)。しかし、この適応は必ずしも順調ではなく、また顕著な成果を上げているわけではない。著者は、カナダ当局の認定を得るためには数年の追加教育が必要な場合があり、失業の最も報告された理由の一つが語学や職業コースに参加することであると述べている (p.248)。

また、カナダのトルコ移民夫婦の心理的、社会文化的、および婚姻適応に関する研究 (Ataca, B., & Berry, J. W., 2002) も、動的アプローチの三つの基準を示している。「非線形性」に関して、この研究では、トルコ移民夫婦の適応は心理的、社会文化的、そして婚姻適応をカバーしており、例えば心理的適応は、レジリエンス、社会的支援、文化変容態度、差別の影響を受け (p.19)、社会文化的適応は主に言語能力と主流集団との接触に関連している (p.22)。これらの異なる要因が異なる状況下で適応プロセスに与える影響は一貫しておらず、むしろ多くの変数の相互作用に依存している。「状況の手がかり」に関しては、この研究において著者は、トルコ移民集団の文化変容は彼らと受け入れ国であるカナダのメンバーとの相互作用、例えばヨーロッパ系カナダ人との接触が社会文化的適応の重要な要因であるとされていることを発見している。トルコ移民夫婦のうち、社会経済的地位が高いグループは教育水準が高く、英語もより流暢であり、このグループはヨーロッパ系カナダ人との接触が多く、その接触は主流文化への適応を助ける要因となっている。また、文化的距離が大きい (元の文化と受け入れ国の文化の類似性が低い) 場合、新しい文化に特定のスキルを習得することが困難になる可能性がある

(p.24)。「個人の能動的調整」に関しては、この研究では、言語能力が社会文化的適応の重要な予測因子であることが判明している。これは、個人が英語を積極的に学習することで、適応プロセスを調整し、主流社会との相互作用をより良くすることを意味する。さらに、レジリエンスや文化変容態度も、個人が適応プロセスにおいて能動的であることを反映している。例えば、カナダのトルコ夫婦間での文化変容態度の違いが、相互作用を通じ

て互いの適応方法に影響を与える可能性があり、また、婚姻関係において、女性がより多くの自主性を獲得した家庭では、性別役割の変化に対応するために夫婦間での調整が必要となる (p.24)。

カナダにおける中米難民の文化変容態度と文化変容ストレスに関する研究 (Donà, G., & Berry, J. W., 1994) では、母国文化と受け入れ国文化に対する態度の違いが焦点となっている。この研究によれば、母国文化と受け入れ国文化に対して極端に積極的な態度を持つ個人は、逆により高い心理的および身体的ストレスを経験する可能性があることが示されている。具体的には、母国文化に対して極端に積極的な態度を持つ難民の「ホームシック」が心理的および身体的ストレスの原因となり得ることが明らかになっている。また、カナダ社会に対して極端に積極的な態度、すなわちカナダに対して高い期待を抱く被験者は、新しい関係の構築や職探し、その他の不利な文化変容体験など、適応上の問題を予期していない可能性があり、これがより高い心理的および身体的ストレスに関連している (p.68)。これにより、文化変容の過程において「非線形的」な心理的反応が存在することが示唆される。研究における難民の文化変容態度、文化保持、受け入れ社会との相互作用経験などは、すべて「状況の手がかり」として機能し得る。例えば、母国文化に過度に依存することや、母国文化との接触が極めて少ないことは、いずれも心理的ストレスを増加させる可能性がある。それに対し、カナダ文化との中程度の接触は、心理的ストレスを軽減するのに役立つとされる

(p.65)。さらに、「個人の能動的調整」としては、自分の文化変容態度を選択することが挙げられる。研究によれば、カナダにおける中米難民は他の三つの態度よりも統合モデルを選択する傾向が強いことが示されている。すなわち、被験者は自らの文化的アイデンティティを重視し続けると同時に、カナダでの生活を評価しており、難民は失ったものを取り戻し、生活を再構築しようと努力する共通の適応パターンを示している (p.67)。

カナダにおける中国人および華僑の心理的適応に関する研究 (Zheng, X., & Berry, J. W., 1991) においても、動的アプローチの三つの要素を見出すことができる。中国人短期訪問者がカナダ文化に適応する過程で、心理的健康状態がU字型の変化を示すことが言及されている (先に低く、その後高くなる) (p.467)。これは、心理的適応のプロセスが線形的でも一方向的でもないことを意味している。また、期待と実際の接触、さらには接触の不一致が中国人短期訪問者および華僑カナダ人の主観

的適応に有意に関連していることも明らかになっている (p.467)。これらの「状況的手がかり」は、個人の文化変容戦略の選択に影響を与え、それが適応の成果に影響を与える。また、「個人の能動的調整」について、研究では、中国人短期訪問者が文化変容の挑戦に直面した際、積極的な対処法、例えばストレス解消や情報支援の追求を採用する傾向があり、自責といった消極的な方法を用いることが少ないことが指摘されている (p.467)。

カナダにおけるベトナム系、韓国系、インド系アジア人家族における世代間文化変容の違いに関する研究 (Kwak, K., & Berry, J. W., 2001) では、例えばインド系家族において、親と青少年の間で文化変容に関する顕著な差異が見られる。特に文化的伝統や言語能力において顕著である (p.160)。これらの差異は、親と子供が異なる移民経験と異文化体験を持つために、文化変容の段階において異なるプロセスを示すことを示しており、これは「非線形」的な文化変容プロセスを反映している。また、インド系青年は、ベトナム系や韓国系の青年と比べて、居住期間が長いほど「統合」態度を取る傾向が強い (p.160)。これは、居住期間などの「状況の手がかり」が文化変容態度に重要な影響を与えることを示しており、すなわち、母国文化と受け入れ国文化に対する態度の問題が浮き彫りになる。そして、「個人の能動的調整」について、研究では、3つの民族の親がいずれも文化的伝統や言語の領域で子供に「統合」のルートを選ばせる傾向が強いことが明らかになっているが、子供の結婚に関しては、非常に強い「分離」的な傾向を維持している (p.157)。一方で、インド系青年は、文化的伝統や言語能力において親よりも強い「統合」傾向を示すが、ベトナム系や韓国系は逆の傾向を示している (p.159)。これは、異なる出身文化背景を持つ個人が、異なる文化的課題に直面した際に、異なる能動的調整戦略を用いることを反映している。

3.2. 単一国家内の多民族/集団間における文化変容研究

本節では主に中国に焦点を当てており、一つは中国の農民工の文化変容、もう一つは中国の羌族（チャン族）集団についてである。

中国農民工（中国において、農村から都市に出かけて就労する、農村に戸籍を持つ者をいう）の文化変容研究 (Gui, Y., Berry, J. W., & Zheng, Y., 2012) では、動的アプローチの三つの次元がある程度反映されている。研究では、農民工のアイデンティティの形成が農村から都市

への単一線形的なプロセスではなく、むしろ農村アイデンティティと都市アイデンティティが相互に独立していることが指摘されている。また、農民工の社会的アイデンティティ (Social Identity; 個人が自分を特定の社会集団のメンバーとして認識する同一感; p.600) と地域アイデンティティ (Place Identity; 個人が特定の環境に対して抱く帰属感; p.600) の構造には違いがある (p.604)。これらのことは、農民工が都市生活に変容する過程が動的かつ多次元であることを示している。さらに、研究では、社会的アイデンティティにおける「統合」の割合が地域アイデンティティにおける「統合」の割合よりも顕著に高いことが明らかにされている一方で、地域アイデンティティにおいては「同化」戦略がより一般的であることが示されている。つまり、農村への地域的な好意と都市に対する積極的な期待や帰属感が交差する際に、文化変容戦略は著しい差異を示す (pp.606-608)。これは、農民工が異なる状況下で異なる文化変容戦略を採用することを示唆している。また、社会的アイデンティティと地域アイデンティティの異なる自己定義を通じて、農民工は都市環境のストレスに直面した際に異なる文化変容戦略を採用し、心理的・社会的ストレスに対処する可能性があり、ある程度、「個人の能動的調整」の能力が反映されている。

一方、2008年の四川大地震後の羌族集団における社会的支援の調整作用に関する研究 (Han, L., Berry, J. W., Zheng, Y., 2016) では、著者はBerryの二次元文化変容モデルを基に、文化的アイデンティティを「羌族文化的アイデンティティ」と「中国国家的アイデンティティ」に分類した (p.3)。その結果、大地震後において、「統合」戦略（羌族文化的アイデンティティと国家的アイデンティティの両方を保持する）が最も有効であり、個人のレジリエンスを顕著に向上させる一方で、「周辺化」戦略が最も無効であることが明らかになった (p.11)。これは、文化変容が「非線形的」なものであることをある程度示している。また、この研究における「状況の手がかり」、すなわち社会的支援は、文化的アイデンティティがレジリエンスに与える影響の経路を顕著に調整した。具体的には、高いレベルの社会的支援が、文化的アイデンティティのレジリエンスに与える積極的な影響を強化することが明らかになっている。四川大地震が発生した後、中国政府は積極的に対応するために大量の資源を提供し、同時に羌族の人々は日常生活で災害がもたらす逆境に対処するためにいくつか

の積極的な自力救済の措置を講じたことが反映されている(p.10-11)。これは、特定の状況下において、状況の手がかりが文化変容に与える影響を示している。また、「個人の能動的調整」としては、人格特性や精神的信仰も羌族集団の文化変容プロセスにおける重要な要素である。例えば、精神的信仰は、個人の内的な力と楽観的な態度を強化することでレジリエンスを高めることができ、人格特性は、個人が文化変容の挑戦に対処する際により強い適応能力を発揮するのを助ける (pp.9-10)。

3.3. 考察

第3章では、Berryの文化変容理論を基盤に、異文化間心理学における「動的アプローチ」を用いて、文化変容の実証研究を再評価した。特に、「非線形性」、「状況の手がかり」、「個人の能動的調整」という三つの観点から、文化変容プロセスの複雑性と多様性について考察した。

まず、文化変容プロセスの非線形性について考察する。従来の研究では、文化変容は静的で直線的なプロセスとして捉えられがちであり、個人は時間の経過とともに文化的適応が進み、最終的には固定された適応状態に到達するとされていた。しかし、動的アプローチは、文化変容が個人の内的・外的な要因に依存して複雑に変化するプロセスであることを示している。例えば、トルコ移民を対象とした研究 (Aycan, Z., & Berry, J. W., 1996) では、移民がカナダに到着してからの社会経済的地位や心理的健康が、単純な直線的パターンではなく、非線形的な変動を示すことが明らかにされた。この研究は、文化変容が固定的な終着点に至るのではなく、むしろ絶え間なく変動し続けるプロセスであることを示唆している。また、カナダにおける中国人短期訪問者を対象とした研究 (Zheng, X., & Berry, J. W., 1991) においても、非線形的な文化変容プロセスが確認されている。この研究によれば、訪問者の心理的健康状態は、最初に急激に悪化し、その後徐々に回復するU字型のパターンを示した。これにより、文化変容が単純な直線的進行ではなく、適応の過程で一時的な困難や文化変容ストレスが生じ、その後の適応につながる可能性が示唆された。

次に、動的アプローチにおいては、「状況の手がかり」が文化変容において重要な役割を果たすとされている。異なる社会的状況が、個人の文化的フレームを活性化させ、特定の文化に基づく行動を促す可能性がある。トルコ移民を対象とした研究 (Aycan, Z., & Berry, J. W., 1996) では、移民が直面する言語能力の低下や職業

資格の不足といった状況の手がかりが、文化変容の障壁として機能している一方、社会的支援がその障壁を克服する要因となることが示された。また、中米難民に関する研究 (Donà, G., & Berry, J. W., 1994) では、母国文化と受け入れ国文化に対する態度の違いが、文化変容ストレスを引き起こす一因となることが示されており、文化変容における状況の手がかりの重要性が強調されている。

さらに、動的アプローチは、個人が文化変容のプロセスにおいて受動的な存在ではなく、むしろ能動的に自身の文化的アイデンティティを調整し、適応を図ることができるという視点を提供している。カナダにおけるトルコ移民夫婦の研究 (Ataca, B., & Berry, J. W., 2002) では、女性が家庭内での自主性を高めることで、家族内の性別役割の変化に対応していることが示された。また、インド系やベトナム系、韓国系の移民青少年を対象とした研究 (Kwak, K., & Berry, J. W., 2001) では、親世代と異なる文化変容戦略を選択することで、青少年が自らの適応方法を模索していることが確認された。これらの結果は、文化変容が個人の能動的な努力により調整されるプロセスであり、個別の状況に応じて柔軟に変化することを示している。

4. 文化変容に及ぼす国家文化政策の影響

筆者は文化変容に関する実証研究を読む中で、国家文化政策と移民の文化変容の関係が密接であることを認識している。国家文化政策は移民の文化変容プロセスにおいて重要な役割を果たし、移民と受け入れ国文化の相互作用のあり方、心理的・社会文化的適応、そして自身の文化的アイデンティティをどのように維持するかに影響を与えている。

特に、国家文化政策は移民の文化変容戦略の形成において重要な役割を果たしている。例えば、第二世代移民青少年がモンリオールとパリで文化変容、差別、および適応性を研究した結果 (Berry, J. W., Sabatier, C., 2010)、カナダとフランスの文化政策が第二世代移民青少年の文化変容戦略に大きな影響を与えていることが明らかになった。カナダの多文化主義政策は移民の青少年に「統合」戦略を取る傾向を強めさせ、特にケベック州のインターカルチュラリズム (間文化主義) は文化の維持と表現を奨励しており、これがより良い適応結果と関連している。そのため、モンリオールの移民は民族文化の態度や行動においてよ

り高いスコアを示し、差別を感じる事が少ない (p.196)。一方、フランスの同化政策は彼らに「同化」戦略を選ばせ、出身文化を諦めて主流文化に適応させようとするが、この戦略は常に大きな文化変容ストレスと文化的衝突を伴う。その結果、パリの移民青少年は「分離」や「統合」戦略において、より高いレベルの差別を感じる事が多い (p.204)。

また、国家文化政策は移民が文化変容プロセスで経験する文化変容ストレスにも大きな影響を与える。インド移民におけるアメリカでの文化変容態度に関する研究 (Krishnan, A., & Berry, J. W., 1992) では、アメリカの政策は表面的には多文化主義を提唱しているが、実際には「同化」を重視している。このため、インド移民は文化変容のプロセスでより大きな課題に直面している。特に、出身文化を維持しつつ主流文化に溶け込むという矛盾をどう解決するかが難しい問題となっている。完全に同化しようとする移民は高いレベルの心理的ストレスを経験しやすく、一方で高い「統合」の態度を持つ人々は二つの文化の中で比較的快適に感じ、全体的なストレスが少ない (p.209)。

さらに、国家文化政策は移民が元々の文化を維持することにも影響を与える。ギリシャ家庭の価値観の文化変容に関する研究 (Georgas, J., Berry, J. W., Shaw, A., Christakopoulou, S., & Mylonas, K., 1996) では、カナダでは公式に多文化主義の政策が取られており、多くの人々が「統合」態度を受け入れているため、カナダに住むギリシャ人は、ヨーロッパ (特にフランスの同化政策) のギリシャ人よりも多くのギリシャ家庭の価値観を保持していることが指摘されている (p.336)。

5. まとめ

本稿では、Berry の文化変容理論を中心に、多文化社会における文化変容プロセスやモデル、そしてその複雑性について考察した。まず、Berry は文化変容を集団レベルと個人レベルで捉え、個人レベルにおける文化変容は、行動の変化と、文化変容ストレスに分類され、これらが文化変容のプロセスでどのように影響を与えるかが明らかにされている。また、Berry の文化変容モデルでは、文化変容戦略として「統合」「分離」「同化」「周辺化」の4つが提案されており、これらは個人が文化的アイデンティティを維持する意向や他の文化との関係をどう捉えるかによって選択される。さらに、文

化変容の結果として生じる適応には、「心理的適応」と「社会文化的適応」の2つの側面があり、これらが個人の幸福感や社会的つながりなどに影響を与える。

次に、Hong, Y.-y.ら (1998) が提唱した「動的アプローチ」を基に、文化変容が静的で直線的なプロセスではなく、非線形的であること、また状況に応じて変動しえるものであることが示唆されている。このアプローチでは、文化変容が「状況的手がかり」や「個人の能動的調整」に大きく影響される動的なプロセスであり、個人が異なる文化的フレームを柔軟に切り替えながら変容して適応していく様子が強調されている。

最後に、国家文化政策が文化変容戦略の選択や文化変容ストレス、そして文化の維持に与える影響も分析し、多文化主義政策や同化政策が個人の文化変容や適応に及ぼす影響についても考察した。

Berry 文化変容理論は実証的研究に広く用いられているが、実は限界があると主張する学者もいる。Rudmin (2003) は、Berry によって提唱された文化変容の四分法モデルに対して批判を行い、文化変容を同化、分離、統合、そして周辺化という4つのカテゴリーに単純化することは、複雑な文化的相互作用を無視していると指摘した。特に、「周辺化」というカテゴリーは、測定が困難であり、実証研究において互いに矛盾する結果がしばしば見られるとされている。また、Rudmin (2003) は、四分法モデルが学術的に広く受け入れられているにもかかわらず、複雑な文化変容現象を説明する際に説明力と実用性に欠けているとし、特に公共政策の策定や異文化間の対立の解決においてはその限界が顕著であると述べている。

また、Schwartz ら (2010) も Berry の文化変容理論の限界について批判した。Berry の二次元モデルは、文化変容を「原文化の保持」と「受入文化との交流」という2つの独立した次元に単純化しており、文化変容の複雑性を十分に捉えられていない。特に、文化実践、価値観、アイデンティティの変化は多面的かつ独立して進行するプロセスであり、単純な分類では説明しきれないと指摘している。Rudmin (2003) の指摘と同様に、Berry の「周辺化」カテゴリーは、実証研究において効果的に測定することが困難であり、そのような群集はほとんど存在しないか、非常に小規模であるため、測定ツールの信頼性や有効性も欠如しているとされている。加えて、Berry のモデルは自発的移民や難民といった異なるタイプの移民の文化変容における差異を考慮しておらず、この「一律的な」アプローチは、複雑な社会的背景を無視

していると批判している。

本稿にはいくつかの不足点も見られる。具体的な実証研究の事例を挙げているが、その結果がどのように理論全体と結びつくのかについての詳細な分析が不足している。また、理論的な枠組みを提示しているものの、これをどのように実際の研究に応用していくか、具体的な方法論や調査手法、そして具体的なデータに関する議論が十分に行われていない。

本稿での理論的な考察は今後の研究の方向性を示しているものの、実際の研究を進展させるためには、理論を実際の研究の中に運用し、具体的なエビデンスに基づいて自ら発展させることが求められる。

<参考文献>

- Aycan, Z., & Berry, J. W., 1996, "Impact of employment-related experiences on immigrants' psychological well-being and adaptation to Canada", *Canadian Journal of Behavioural Science*, 28(3), pp.240-251
- Ataca, B., & Berry, J. W., 2002, "Psychological, sociocultural, and marital adaptation of Turkish immigrant couples in Canada", *International Journal of Psychology*, 37(1), pp.13-26.
- Berry, J. W., 1980, "Acculturation as varieties of adaptation", Amado M Padilla(Ed), *Acculturation: Theory, models and some new findings*, Avalon Publishing, pp.9-25.
- Berry, J. W., Kim, U., Minde, T., & Mok, D., 1987, "Comparative studies of acculturative stress", *International migration review*, 21(3), pp.491-511.
- Berry, J. W., 1992, "Acculturation and adaptation in a new society", *International migration*, 30, pp.69-85.
- Berry, J. W., 1995, "Psychology of acculturation", Goldberger, N. R., & Veroff, J. B. (Eds.), *The Culture and Psychology Reader*, New York University Press, pp.457-488.
- Berry, J. W., David L Sam, 1997, "Acculturation and adaptation", *Handbook of cross-cultural psychology*, 3(2), pp.291-326.
- Berry, J. W., 2003, "Conceptual approaches to acculturation", In K. M. Chun, P. Balls Organista, & G. Marín (Eds.), *Acculturation: Advances in theory, measurement, and applied research*, American Psychological Association, pp.17-37.
- Berry, J. W., 2005, "Acculturation: Living successfully in two cultures", *International Journal of Intercultural Relations*, 29(6), pp.697-712.
- Berry, J. W., 2006, "Acculturative stress", Wong, P.T.P., Wong, L.C.J. (eds), *Handbook of Multicultural Perspectives on Stress and Coping*, International and Cultural Psychology, Springer, Boston, MA., pp.287-298.
- Berry, J. W., 2008, "Globalisation and acculturation", *International journal of intercultural relations*, 32(4), pp.328-336.
- Berry, J. W., Sabatier, C., 2010, "Acculturation, discrimination, and adaptation among second generation immigrant youth in Montreal and Paris", *International Journal of Intercultural Relations*, 34(3), pp.191-207.
- Donà, G., & Berry, J. W., 1994, "Acculturation attitudes and acculturative stress of Central American refugees", *International Journal of Psychology*, 29(1), pp.57-70.
- Gui, Y., Berry, J. W., & Zheng, Y., 2012, "Migrant worker acculturation in China", *International Journal of Intercultural Relations*, 36(4), pp.598-610.
- Georgas, J., Berry, J. W., Shaw, A., Christakopoulou, S., & Mylonas, K., 1996, "Acculturation of Greek family values", *Journal of Cross-Cultural Psychology*, 27(3), pp.329-338.
- Gordon, 1964, *The Nature of Assimilation*, *Assimilation in American Life*, New York: Oxford University Press, pp.60-83.
- Graves, 1967, "Psychological Acculturation in a Tri-Ethnic Community", *Southwestern Journal of Anthropology*, 23(4), pp.337-350.
- Hong, Y.-y., Morris, M. W., Chiu, C.-y., & Benet-Martínez, V., 1998, "How Cultures Move Through Minds: A Dynamic Constructivist Approach to Culture and Cognition", *Working Paper*, No. 1536, pp.1-48.
- Han, L., Berry, J. W., Zheng, Y., 2016, "The relationship of acculturation strategies to resilience: The moderating impact of social support among Qiang ethnicity following the 2008 Chinese earthquake", *PloS(Public Library of Science) one*, 11(10), pp.1-16.
- Kwak, K., & Berry, J. W., 2001, "Generational differences in acculturation among Asian families in Canada: A comparison of Vietnamese, Korean, and East-Indian groups", *International Journal of Psychology*, 36(3), pp.152-162.
- Krishnan, A., & Berry, J. W., 1992, "Acculturative Stress and Acculturation Attitudes Among Indian Immigrants to the United States", *Psychology and Developing Societies*, 4(2),

- pp.187-212.
- Rudmin, F. W., 2003, "Critical history of the acculturation psychology of assimilation, separation, integration, and marginalization", *Review of General Psychology*, 7(1), pp.3-37.
- Redfield, Linton, & Herskovits, 1936, "Memorandum for the Study of Acculturation", *American Anthropologist*, 38(1), pp.149-152.
- Sam, D. L., & Berry, J. W., 2010, "Acculturation: When individuals and groups of different cultural backgrounds meet", *Perspectives on Psychological Science*, 5(4), pp.472-481.
- Schwartz, S. J., Unger, J. B., Zamboanga, B. L., & Szapocznik, J., 2010, "Rethinking the concept of acculturation: Implications for theory and research", *American Psychologist*, 65(4), pp.237-251.
- The Social Science Research Council Summer Seminar on Acculturation, 1954, "Acculturation: An Exploratory Formulation", *American Anthropologist*, 56(6), pp.973-1002.
- Ulrich Beck, 1997, *Was ist Globalisierung?*, Suhrkamp Verlag, Frankfurt am Main., (=2008, 常和芳訳『什么是全球化? 全球主義的曲解: 応対全球化』華東師範大学出版社, p.24.)
- Zheng, X., & Berry, J. W., 1991, "Psychological adaptation of Chinese sojourners in Canada", *International Journal of Psychology*, 26(4), pp.451-470.
- 趙師哲、田中共子, 2020, 「在日中国人の文化変容方略に関する探索的研究」『多文化関係学』, 17, pp.45-55.
- 趙師哲、田中共子, 2022, 「日本在住の中国出身長期滞在者における文化変容方略」『多文化関係学』, 19, pp.81-99.
- 井上孝代、伊藤武彦, 1997, 「留学生の来日1年目の文化受容態度と精神的健康」『心理学研究』, 68(4), pp.298-304.
- 木村真理子, 1996, 「文化変容ストレスに対するソーシャルサポートのインパクト: カナダ日系女性移住者の場合」『社会福祉学』, 37(1), pp.20-37.
- 前田憲次, 2018, 「フィリピン人技能実習生のメンタルヘルスに関連するリスク要因: 文化変容方略に着目して」『国際保健医療』, 33(4), pp.303-312.
- 中本進一, 2021, 「外国人人材の自己実現から見る日本社会の異文化受容力」『留学生交流・指導研究』, 23, pp.23-36.
- 孫進, 2010, 「文化适应問題研究: 西方の理論とモデル」『北京師範大学学報 (社会科学版)』, 5, pp.45-52.
- 余偉、鄭鋼, 2005, 「跨文化心理学中的文化适应研究」『心理科学進展』, 13(6), pp.836-846.